

お薬のしおり

小児の肺炎球菌ワクチン No.132 (H25.1)

東京医科大学病院 薬剤部

肺炎球菌^{はいえんきゅうきん}は、子供の多くがノドや鼻の奥^{みじか}に持っている身近な菌ですが、菌を持っているだけで病気にかかるというわけではありません。しかし、月齢の低い子供や高齢者は、この肺炎球菌に対する抵抗力が弱いため、感染を引き起こすことがあります。特に子供の体力や抵抗力が落ちた時などに、いつもは菌がない血液の中に入り込むことで感染を起こし重症化^{じゅうじょうか}することもあります。

肺炎球菌によって起こる主な病気には、肺炎、気管支炎などの呼吸器感染症^{ふくびくうえん}や副鼻腔炎^{ちゅうじえん}、中耳炎^{すいまくえん}、髄膜炎^{きんけつしやう}、菌血症^{きんけつしやう}などがあります。これらの病気は、他の細菌やウイルスが原因でおこることもありますが、肺炎球菌が主な原因であることがほとんどで、菌血症では80%、肺炎では30%、細菌性髄膜炎では20~30%、細菌性の中耳炎では30%が肺炎球菌が原因となっています。なかでも、細菌性髄膜炎は、肺炎球菌やヒブ（インフルエンザ菌b型：Hib）などの細菌が、脳や脊髄^{せきずい}を包む髄膜の奥まで入り込んで起こる病気^{りかん}で、日本では、毎年約千人の小児が罹患^{りかん}しています。この細菌性髄膜炎は、風邪^{かぜ}などの症状と似た症状から発症し、早い段階での診断が難しく、重症化することも多く、後遺症^{こういしやう}を残すこともあるため、ワクチンなどで予防することが重要となります。今回は、小児用の肺炎球菌ワクチンに関して、よく寄せられる質問を中心にお話したいと思います。

◆肺炎球菌ワクチンは何種類あるか？その違いは？

現在、肺炎球菌による感染症を予防するワクチンとしては、2歳以上で肺炎球菌による感染のリスクが高い人および高齢者を対象とした23価肺炎球菌多糖体^{たどうたい}ワクチン「ニューモバックス NP」と、生後2ヶ月以上9歳以下が対象とした7価肺炎球菌結合型^{けんたく}ワクチン「プレベナー水性懸濁皮下注」の2種類があります。肺炎球菌は90種類以上の型に分けられますが、その中でも重



い病気を引き起こすことの多い7つの型の肺炎球菌による病気を、この小児用肺炎球菌ワクチンによって予防することができます。

◆小児用肺炎球菌ワクチンの接種時期と回数は？

小児用肺炎球菌ワクチンの接種回数は、肺炎球菌ワクチンを初めて接種する月齢によって異なります。標準は4回で、生後2ヶ月から6ヶ月に1回目、27日以上の間隔を空けて2回目および3回目を接種し、60日以上の間隔を空けて4回目を接種します。初回免疫として、3回目までの接種は1歳未満までに行い、追加免疫である4回目は12～15ヶ月の間に行うこととなっています。標準的なスケジュールで接種しなかった場合、月齢によって接種回数や時期が異なるため、かかりつけ医に相談をし、早めにスケジュールを決めるようにしましょう。

◆生後2ヶ月からの接種の理由は？

生後2ヶ月を過ぎると、母親からもらった抗体が減少し、免疫力が低下することで、様々な感染症にかかる可能性があります。生後2～3ヶ月から、肺炎球菌やヒブ（インフルエンザ菌b型：Hib）による細菌性髄膜炎の発症がみられるのはこのためです。また、細菌性髄膜炎に最もかかりやすいのは、免疫力が未発達な2歳ぐらいまでで、かかった小児の半数は0歳児で、1歳前後がかかりやすいとされています。よって、生後2ヶ月からのワクチン接種により、細菌性髄膜炎などを予防するための免疫を作ることができます。

◆同時に他のワクチンも接種することは可能か？

小児用肺炎球菌ワクチン、ヒブワクチンやDPT（3種混合）ワクチンなどのワクチンは、それぞれ別々の日に接種できますが、医師の判断と保護者の方の同意によって、同時に複数のワクチンを接種することは可能です。別々の日に複数のワクチンを接種する場合には、原則として、小児用肺炎球菌、ヒブ、DPT（3種混合）などの不活化ワクチンの接種後は6日以上、BCG、ポリオなどの生ワクチンの接種後は27日以上の間隔を空けるとされています。

小児用肺炎球菌ワクチンを接種した後にみられる副反応は、他のワクチンと同様、発熱や注射した部位の腫れや赤みなどで、頻度も同じ程度とされています。何か異常を感じたり、不安なことがあったりする場合は接種を受けた医療機関の医師に相談するようにしてください。

